
行きついた場所が悪い。

蓮華永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行きついた場所が悪い。

【Nコード】

N7570P

【作者名】

蓮華永

【あらすじ】

普通の高校生、鳴瀬雪弥はある日、銀髪の男、クローディアに連れ去られ、『ブラックアウトワールド』の王にされてしまった。

初代王の魂が宿っていると言うが、雪弥に其の自覚なし。

そんな雪弥が織り成す異世界ファンタジー&コメディをお楽しみください！

ぶろふいーる。

プロフィール

ナルセ
鳴瀬 ユキヤ
雪弥

年齢：17歳

備考：ごく普通の高校生だったが、いきなり現れたクローディアにより、“ブラックアウトワールド”に連れてこられた。
初代王の魂を継いでいるが本人にその自覚なし。
結構お人好し。

クローディア「ノットデイ

年齢：謎

備考：雪弥の護衛兼教師。

丁寧な口調だが一人称は俺。素は口が滅茶苦茶悪い。
兄がいるが毛嫌いしている。

カストル「クラウニー

年齢：謎

備考：雪弥の世話係。

人間嫌いで雪弥の事も嫌いで王と認めていない。

クローディアにちよくちよくおちよくられている。

クリカラ
倶梨伽羅
珊瑚劉

年齢：20歳

備考：初代王の記憶を継いだ者。

昔のトラウマから身体の成長が止まった。外見年齢12〜

14歳。

少し対人恐怖症。

セシアⅡノットデイ

年齢：謎

備考：クローディアの兄。

珊瑚劉の護衛兼教師。

雪弥を気に入っており、よく抱きついている。

ブラコンではあるがその倍以上にクローディアで遊ぶの

が大好

初対面は最悪。

何もかもが普通で、退屈だけど、充実した毎日。

だけど、一人の男の所為で俺の普通の日常が・・・壊されていく。

それは、ある日の学校帰りの事。何時も通りの帰路を通って、家に着き、誰も居ないはずのリビングに、其の男は居た。

「初めまして、鳴瀬雪弥君。なるせ ゆきや俺の名は、クローディア」ノットデイと申します。貴方をお迎えにまいりました・・・」

黒いコートに黒のシルクハット、床に届きそうなほど長い銀髪は、後ろで丁寧に括られている。そんな男が俺を迎えに来る理由は何だ？

「あんた、誰・・・？」

「先程、名乗りましたが・・・。お忘れですが・・・？」
クローディアと名乗った男は首を傾げた。男前な顔をしているが、そういう仕草を見ると、可愛く見えるものだ。

「取り敢えず、お迎えにまいりました。我らの王よ——」

「・・・は？ 『王』・・・？」

俺は聞き返したが、男はニイと悪辣に笑い、叫んだ。

「イツツ、ショータイムッ！」

「・・・」

その一言で、こいつ、阿呆決定。

「さ、参りましょうか。貴方の世界、『ブラックアウトワールド』へ……」

クローディアが俺に手を差し伸べる。俺はそれを取らなかったが、クローディアがグイツと俺を引っ張り、一瞬にして、視界に広がる光景が変わった。不覚にも、俺は凄いと思ってしまい、つつい、口に出してしまう。

「スゲエ……」

「凄いでしょう？ 行きつく場所は、貴方の世界……、貴方が創りだした、世界なのです……」

正直、クローディアの云っていることの意味は判らなかった。だけど、一つだけ、判ることは――。

俺は意味のわからないものに巻き込まれたようだ。

「なあ……」

「はい、なんででしょう？」

「なんで、落ちてんの……？」

俺は無表情で聞いた。と、いうか、無表情を保つのに、全神経を強張らせた。だって、そうしてないといけない気がしたからだ。

「……そりゃ、今居る所が空なんですから、落ちるに決まってるでしょう？」

「“所”じゃねえだろ！ というか、俺は何故お前に姬ダツコをされにやなんのだああ……！」

「何となく、誰かに姬ダツコを試してみたかったものですから！」

「それを俺にするなあ……！」

俺は叫んだが、クローディアは笑顔で聞き流した。

初対面は最悪。
(後書き)

さ、是は、根気よく終わるまで書きたいと思います。
多分、気が向いたらの不規則更新だと思っています。

人間、諦めが肝心。諦め切れたらな・・・。(前書き)

つづつぐ長いサブタイだな・・・。

人間、諦めが肝心。諦め切れたらな・・・。

「なあ、此処つて・・・？」

「此処が貴方の世界、『ブラックアウトワールド』です。さ、城に参りましょう」

「は、はあ・・・」

目の前に広がる光景はよくあるRPGの建物の様に、煉瓦造りれんがで、市でもやっているのか、其処は喧騒けんそうに包まれていた。

少し、目線を上げると、山奥に、大きな城がある。其処が俺達は今から行くところである。

「さ、歩くのはめんどくさいですし、飛びますか・・・」

「・・・、クローディアさん。ワンモアプリーズ？」

「はい？ 俺は“飛び”ましようか、と云ったのですが・・・」

「

俺は飛べない」

クローディアは綺麗な顔して、意味のわからないことをほざいた。

“飛び”だと！？ 俺は人間だ！ 飛べるわけねえだろ！

「大丈夫です。俺が貴方を抱きかかえるんで」

「まさか、姫ダツコとか云わねえだろうな・・・？」

にこにこ笑っているクローディアを俺は睨んだ。クローディアは済ました顔で、答えた。

「勿論、姫ダツコです！」

「厭だああーーーーーっ！」

叫んだが、時すでに遅し。

俺はクローディアに姫ダツコをされ、クローディアは其のまま飛んだ。

「此処が『血薔薇城』。貴方の住居です」

「うわぁ。間近で見ると毒々しいな・・・」

「貴方が・・・、初代がデザインしたんですよ？　ま、俺も最初はそう思いましたが、きつと云っては成りません」

「初代王よ・・・」

俺は上を見上げた。遠くからでも判っていたけど、雲にかかっているよな、てっぺん・・・。

「さ、入りましょうか・・・」

「お、おう・・・」

恐る恐る入ると、入った瞬間、薔薇のいい香りがした。薔薇の花弁が風に舞っている。

「スゲエ、キレー・・・」

「綺麗でしょう・・・？　これ、俺が毎朝手入れしているんです。ま、お手伝いですけどね」

クローディアは少し苦笑いしながら、云った。手伝いでも、これだけ綺麗な薔薇を咲かせるためにどれだけ手間暇を尽くしたことが・・・。

「手伝いでもスゲエよ。こんだけ綺麗に咲かせてるんなら、余計にな・・・」

淡く微笑んで云ってやると、クローディアは眼を見開き、顔を少し紅くしながら、俺の頭を撫でた。

「有難うございます。これからも綺麗に咲かせますね・・・」

「ん、頑張れよ・・・」

クローディアの手を振り払いながらも、俺は激励の言葉を云った。

照れ臭い・・・。つか、頭撫でるな・・・。

人間、諦めが肝心。諦め切れたらな・・・。
(後書き)

楽しいです、これは主人公奇めが楽しいです。

初対面って、ホント最悪だな。

中に入ると、外観との物凄いギャップを生んでいた。床と壁が大理石で、全てが光沢のあるものだった。きつと毎日時間をかけて掃除をしているんだろう。

「綺麗に掃除してんな………」

「ええ、此処に働く人たちは皆、掃除好きなので……」
なんか、隣にクローディアが居るのがデフォルトになっている気が……。 たった数時間しか、経っていないのに……！

「来たか、鳴瀬雪弥……」

突然、声が聞こえた。其の声のする方に向くと、茶髪の男が居た。金眼で、眼鏡かけてる……。 インテリ？

「私はカストルⅡクラウニー。お前の教育係だ……」

わあい、初対面で『お前』と云われた。 ショック……。 というか、失礼だろ。

「初対面でいきなり『お前』呼びとか……。 失礼じゃね？」

「は！ お前如きに無礼も糞クソもあつか！ 私は人間が嫌いなんでね……」

あー、成程。 俺が人間だからか……。 ……。 なら……。

「さつさと此の城から出て行けばいいんじゃない」

「ふざけたことを……。 お前なんか指図される覚えは……」

「其処までです！」

クローディアが俺とカストルの間に入ってきた。 そういえば、居たな、こいつ……。

「いい加減にしなさい、カストル……。 王に向かって失礼です……」

「……」

「私はそいつを王とは認めていない！」

「では、貴方は今まで忠誠を誓ってきた、前王の言葉を裏切るんですね……。“次の王を守れ”と云われたのに……」

クローディアがカストルを睨むと、少し怖いと思った。クローディアでもこんな顔するんだな……。

「そ、それは……！ 裏切ってなど……」

「いいえ、裏切りです。前王が望んだことを、貴方は裏切ったのです……！」

「……ッ。と、取り敢えず、私はそいつを王とは認めない……！」

「あ……」

カストルは走り出し……転んだ。

「ああ云う所は可愛いんですね……！」

きつと、こいつは毎日カストルをからかっている。絶対にカストルはこいつにからかわれている……！ だって、こいつ今、物凄い悪辣に笑ってる……！

「さ、先を進みましょうか……？」

「あ、ああ……」

「ご愁傷様、カストル……」。

初対面って、ホント最悪だな。(後書き)

カストルも十分に苛めれます。
いじりやすいです。

着せ替え大会。やりたくなかった・・・。

俺は顔は母親似で、完全に女顔。髪はウルフカットもどきで、後ろ首を隠すぐらいの長さ。眼は鮮やかな碧色。

「ほんと、綺麗ですよね・・・」

「顎あごを掴むなあー！」

俺の絶叫は、城の中を駆け巡った。

「あの、馬鹿・・・！」

カストルは手に握っていた万年筆を握り折った。

「何で、俺はドレスを着ているんだ！？ さっきまで男物の服だったのに！！」

「それは勿論、俺が着せただけですが？」

「勿論じゃねーだろ！！ なんなんだよ、お前は・・・」

俺が今来ているのは、シルク素材の、スカイブルーのドレス。少しうたたね転寝して、起きたらこうなっていた。ご丁寧にガーターベルトも付けてあった。よし、セクハラで訴えよう！

「にしても、本当に似合ってますねー。可愛過ぎます！ 俺はいつそ、貴方を女にしたいです！」

「しなくて結構！ つか、するな！」

「えー・・・勿体無い・・・」

「何がだよ！？」

こいつの考えてることがよく判らん・・・。

「お前等、執務^{しつむ}はどうしたあ！！　って鳴瀬雪弥・・・お前なんて恰好を・・・！」

カストルが乗り込んできました。云いたいことが二つ。まず、見ないでください。それと、執務なんて、やってません。それより、顔が紅くなってるけど、どうした、カストルよ。

「クローディア・・・お前何してるんだ・・・」

「あ、カストルも着ます？　以外に似合うかもですよ？」

「死んでも厭だな」

「前王が着せたいと仰っていました。」

「よし、着てやるか」

「軽いな、お前・・・」

と、云うことでカストルも来てみた。

「何故にショート丈・・・」

カストルが来たドレスは丈が短いものだった。以外にも、足は細く綺麗なので、ショート丈も似合っていた。うん、女になってしまえ、カストル。

「あ、雪弥君もショートにしましょう！」

「厭だ。死んでも厭だ。」

「さて、ショートはつと・・・」

「クローディアさんは人の話を聞きましょう」

人の話を聞かずに、クローディアはドレスを探し、見つけ、それを持って俺を追いかけてきた。俺は猛ダッシュで逃げたが、何かに躓き、転んだ。膝痛し。

「流石俺の雪弥君！　似合っています！」

「俺が何時、お前のモノになったあ！？」

俺が着たドレスはカストルのやつより、短く、ガーターベルトが目立つものだった。

「恥ずい・・・」

「お前男か？」

「カストルにまで云われたーっ！」

何故かカストルに云われるとショックだ。でも、自分で云うのもあれだけど、確かに似合ってる……。鏡を見ると、知らない女が……。同じ顔の女が居る様な感じ……。

「ね？ 自分でも似合ってると思うでしょう？」

「う……。！」

図星をつかれ、俺は反論が出来なかった。

着せ替え大会。やりたくなかった・・・。(後書き)

楽しいですよ、女装。

あ、クローディアを忘れていた・・・。

何時かまたやってみましょうかね？

目には目を 齒には齒を。

「雪弥君・・・是は此の前の仕返しですか・・・・・・・・・・？」

「おう。意外に似合ってたな」

俺はにまにまと笑いながら云った。

今、クローディアにドレスを着せています。此の前の仕返しだ。

クローディアに着せているのは、マゼンダ色のドレス。クローディアの銀髪がよく映える。

「にしても、クソ長い髪をよくこんな風に綺麗に結えましたね・・・」

クローディアは自分の髪を弄る。髪は俺が結った。

膝まで長い髪の方をコテで巻いて、横髪を三ツ編みをして、後ろで括った。

「と、云うか・・・此処にコテなんてあったんですね・・・・・・・・」

「ホント、俺もビビった。女中さんに聞いたたら、快く出してくれた」

「女中共め・・・！」

クローディアは唸るように云い、握りこぶしをつくった。手袋してるんだから、止めるよ。

クローディアには今日はずっと其のままで居てもらうことになった。と云うか、頼み込んだ。

「あのですね、本当に今日限りですよ、雪弥君・・・・。明日からは何時も通りの恰好させてもらいますからね・・・・・・・・」

「うん、判ってる」

何だかんだ云って、クローディアは優しいなあ……。本当に厭
だったら一日限定でも断るはずだ。

俺は満面の笑みで勉強に勤^{いそ}しんだ。

『ブラックアウトワールド』

初代王、ユキヤによって創られた世界。

人口は年々増えて行き、貿易も観光も栄えた。

「同じ名前……」

「ええ、貴方は初代王の生まれ変わり何です。初代王の魂も受け継
いでいるんです」

淡く笑う。クローディアの自然な微笑みは初めて見た。

「ふーん……」

魂、ね……。

「実感。湧かないなあ……」

「まあ、仕方のないことです。覚えているものじゃありませんし」
と、笑う。クローディア、そうして笑うと本物の女みたいだな。

コンコン

ノックの音がした。返事をするとかストルが入ってきて、クロー
ディアを見たたん、顔を勢いよくひきつらせた。

「おい、クローディア……。何故お前はそんな恰好をしている……」

「雪弥君に頼まれたので。此の髪も綺麗に結ってくれたんですよ？」
カストルに見せるように、くるりと回るクローディア。カストル、

何故赤面する・・・。

たっぷりと夜が更け、睡魔に襲われかけた時、クローディアが入ってきた。

「失礼します、雪弥君。起きていますか？」

「・・・クロー、ディア・・・？」

俺はのそりと身体を起こした。クローディアはベッドの端に腰かけ、俺の髪を撫でた。

「本日はお疲れ様でした。それと、女装はこれっきりですからね・・・」

「ん・・・判ってる・・・」

「物判りのいい人だ・・・。だから俺は貴方を選んだ・・・」

クローディアは不敵な笑みを零す。俺はクローディアに云った事がよく判らず、首を傾げる。すると、重力に逆らえず頭がベッドの上に落ちる。

「クローディア・・・？」

「貴方は初代王の魂を受け継いだ『一人』。其の中で一番力が強い・・・。本当に貴方を選んでよかった・・・」

その言葉を聞いた共に、俺は意識を完全に手放した。

記憶は頼りにならないな。

昨日、クローディアが来て、其の時に何か云っていた。だけど、それが思い出せない…………。

「頭が、痛い……………」

頭をさすりながら、起きる。すると、控えめなノックが聞こえた。「はい、どうぞ」

「失礼します。お早うございます、雪弥君。昨夜はよく眠れましたか？」

「ッ、クローディア…………。はよ、よくは、眠れてない…………。……。なんか、頭痛い……………」

クローディアの姿に吃驚しながらも何時も通りになる様、答えた。

「雪弥君」

「ん？ 何だ…………？」

着替えようと思ってベッドから下りるとクローディアが声をかけてきた。

「昨日、俺が云った事…………。覚えていらっしゃいますか？」

ばれないよう眼を見開き、首を横に振った。

「いや、お前が来たところまでは覚えている。だけど、無いを云ったかは覚えてない」

「…………そう、ですか…………。なら、いいのです」

そう云うくせに、何でそんな顔するんだ？ お前は…………。意味判んねえ……………」

「？ 何か云いましたか？ 雪弥君」

「んにゃ、何も…………。何も云ってない」

「そうですか。食事が出来ているので、すぐに来て下さいね」

そう云い、クローディアは出て行った。

「なんだ、そのどんより顔は．．．．．。気味が悪いぞ」

「カストル、それは酷い言い草だ。というか、此処にクローディアが居なくて、よかった．．．．．」

「何故、其処であいつの名前が出てくる？」

腕を組みながらカストルが問いかけてくる。俺は顎を机のへりに置き、上目づかいでカストルを見た。

「昨日、クローディアが部屋に来て、何か云っていたんだよ．．．。それが何か思い．．．．．」

——「貴方は初代王の魂を受け継いだ『一人』。其の中で一番力が強い．．．。本当に貴方を選んでよかった．．．．．」

「．．．ひと、り．．．．．？　なあ、カストル．．．．．」

「何だ」

俺は顔を上げ、カストルを真つ直ぐに見る。

「初代王の魂を．．．受け継いだのって、俺．．．だけ、か．．．．．
．．．？」

俺が聞くとカストルは眼を見開いた。

「．．．それを誰から聞いた．．．．．！？」

「昨日、クローディアが云っていた．．．言葉だと、思う．．．．．
．．．」

「そう、か．．．．．」

カストルは片手で額をおさえ、溜息を吐く。

「頃合いを見て、話す。だから、今は待て。クローディアが勝手に云いだしたら、私に報告をしろ。判ったか？」

「ん、判った．．．．．」

俺は返事をし、眼を軽く瞑った。

カストルが、少しだけ俺に心を開いてくれた気がする。

記憶は頼りにならないな。(後書き)

クローディアは変態のくせに謎な人物。

説明しよう。

「この間は済みません。此の前俺が云った言葉に着いて、説明させてもらいます」

「……は？」

クローディアの発言に、俺は持っていた書類を落とした。

「説、明……？」

「ええ、この間の言葉。雪弥君、覚えているんでしょう？」

「……」

俺は真つ直ぐにクローディアを見る。胡乱うろんげな眼で。

「そんな胡散臭うさんくさいいと云う眼で俺を見ないで下さい」

クローディアは勘弁と云った態で顔の前に手を翳かざした。

「判った。聞く……。俺が判るように説明してくれ」

「イエス、マロード 御意、我が主人」

そう云つて、深々と頭を下げ、クローディアは俺に向き直り、口を開いた。

「以前、云いました通り、貴方は初代王の魂を受け継いでいます。ですが、貴方だけじゃないんです。魂を受け継いだものは、後」
其処で言葉を切り、クローディアは俺の眼を見る。

「一人居ます」

「一人……」

其の言葉を反復させる。

「ですが、均一に受け継がれている訳じゃ、無いんです。もう一人の方は全ての記憶を、貴方は全ての英知えいちと能力ちからを受け継いでいます」「本当に均一じゃねえな。俺の方がめっちゃ、受け継いでんじゃん」「いずれは其の人にもこちらに来ていただなくとはいけません。ですが、きつと……失神するでしょう……」

「どんだけひ弱なんだだよ」

俺はせっかく説明してもらっていると云うのに、躊躇ちゅうちゅうなく突っ込んだ。

「取り敢えず、二人のうち、雪弥君の方が此の国には必要なんですと、云うかある意味もう一人は用無しですね」

「酷ひどえ言い草」

「……理解していただけたでしょうか……」

クローディアが切れ目の瞳をめいっばいたらせ、俺を見る。子犬の様だ……。

「ん、判わかった。理解わかった」

俺が云うと、クローディアはパアと顔を明るくさせた。

「有難ありがたうございます！ 雪弥君ッ」

昼寝後思い出すは今更。

ふわりと、薔薇の香りがした。其の香りで目覚めて、周りを見回すと、窓が開いていた。

「・・・しまった、執務中に寝てしまった・・・」

肌寒いと、思つて窓に近付くと、薔薇園に誰かが居た。それは、鮮やかな銀髪だった。

「あ、クローディア・・・」

何時もの全身真っ黒のスーツじゃなくて、動きやすいシャツとスラックスという恰好だった。ただし、上下真っ黒だが。

「クローディア！ 何してんのーっ？」

「あ、雪弥君！ 起きたんですか？ 今は薔薇の手入れをしてるんです」

「へー・・・。そっち、行つてもいい？」

俺が聞くと、クローディアは満面の笑みで答えた。

「はい、どうぞいらして下さい」

其の返事を聞き、俺は階下へと行つた。

外に出ると、すぐに薔薇の香りが広がる。此の香りは心地よいものだ。

「やつぱ、綺麗だな、此処の薔薇園は・・・」

「でしょ？ 何時も綺麗に咲くようにと、手を焼いているんです」
「だろーな」

にかつと笑つてやると、クローディアは少し困つたように、

「当たり前のような顔をしないで下さい。雪弥君は薔薇の手入れがどれだけ大変か、知らないでしょう？」

と、云つた。

「ああ、知らない。だけど、是のおかげで、どれだけの人の心が癒されてるかは、俺も知ってる」

「それはそうですね。此処はフリーダムな所ですから、誰でも立ち入り出来ますし……」

此の城は、誰もが立ち入り出来る。だけど、入れるのは、此の薔薇園と、他にある植物園のみだ。それでも観光客には好評だ。

「綺麗だ、母さん達にも見せて……」

此処で言葉が途切れる。クローディアは不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「?? どうしたんです、雪弥君？」

「そつえばさ……」

口を開く。

「? はい? 何ですか？」

問い質してくるクローディアに一言。

「俺の、家族は……俺が居なくなっただって知ってる？」

「物凄い今更ですね! 大丈夫です。貴方は時たまあちらへ戻れます。そして、貴方が戻らない限り、あちらでは一刻たりとも『刻』は進みません」

「うつわ、便利ー」

俺が云うと、クローディアは頭を撫でてくれた。

だって、俺今、泣きそうだったんだもん。

たまにはいい経験だろ？

「さて、そろそろ里帰りをしたい気分だ！」

「却下」

「即答！？　まさかの！！？」

クローディアは不機嫌を地で云っている顔で俺を睨んだ。

「何で、即答されなきゃいけないんだ？　帰れるって、お前云ったろ？」

「ええ、云いました。ですが、勝手に帰っていい訳じゃ、ありません！」

俺はクローディアを睨んだ。クローディアも俺を睨んだ。カストルは「馬鹿だ、もう付き合えきれん」と、云って部屋を出て行った。「貴方は此処の王。そろそろ式典しきてんが始まるんですよ！？　此処はあちらと違って、勝手に『刻』が進みます。貴方が不在の間。此処はどうするんです！？」

「そ、それは…………その……。そう、だけど……………」
云い淀む俺に、クローディアは溜息を零した。

「確かに、里帰りと言ったかなんとか微妙ですけど、あちらに帰りたいと思うのは、当然のことですし、俺もよく判りますが、里帰りは許せません！」

「鬼畜、小姑……………」

「な・に・かッ、云いましたか？　雪弥君ッ！？」

挑発的な顔と言葉に、俺は流石にブチ切れた。

「ええ！　ええ、云いましたとも！　こんの、鬼畜！　小姑！　お前なんか、大ッッ嫌いだッ！！！！！」

そう、叫んだ。第二発目が来ると思って、構えていると、クロー

ディアが俯いた。

「貴方は……何も、判ってませんね……………」

そう、呟きが聞こえた。そして、気付いた時には、俺は床に倒れていて、クローディアが俺の跨っていた。

「貴方は、脆い。簡単に俺に押し倒されてしまう。まあ、元から？
王が俺に勝てた試しは、有りませんが。」

「ハアア！？ 王って、前王とかも！？」

俺は大声で聞いた。だって、口が微妙に塞がれてるんだもん。

「ええ、代々、王は俺と剣で勝負しますが、誰も、俺に勝ててません。絶賛記録更新中です！」

クローディアはこのうえなく、綺麗な笑顔で云った。それが、怖いと、一瞬思った。

「貴方はこの世界にとって、掛け替えのない、大切な存在なのです。ですから、事がおさまるまで、あちらに……戻る等、口にしないでください！！」

それは、クローディアの痛切なる願い。今のクローディアの顔は酷く不安定だ。

「……………判った、よ……………」

其処まで、云われたら、断れねえじゃん……………」

「雪弥、君……………。ッ有難うございます！」

「お、っわ！ だ、抱きつくな！ な、泣くな、よ…………？」

「ええ、泣きませんよ。俺は人前で泣いたこと等、有りません」

「それなら、いいや……………」

その後、俺達は其のまま寝てしまい、カストルからの死ぬほど長い説教を受けました（約八時間三十分）。

人の好き嫌いには、口出し無用。

貴方は、私を必要としてくれる。

だから、私は貴方に着いて行く――。

ふわりと風と薔薇の花弁が舞う。

「いい香り。此の部屋は特等席だな」

「ですね。俺も此の部屋は好きです」

色々な種類の薔薇が植えてあるけど、香りはくどくない。心地のいい香りだ。其の香りをかいでいると、俺はだんだん眠くなり、少しずつ眼を閉じて行く。

「・・・・・・雪弥君？ あー・・・・、寝ちゃい、ましたね・・・・」

クローディアの声が聞こえた気がしたけど、俺はそのまま寝た。

勢いよく、扉が開く音がして、俺は眼が覚めた。

「鳴瀬雪弥、クローディア！ 大変だ！」

カストルが入ってきてそうそうに叫んだ。クローディアは首を傾げ、聞き返した。

「どうしたんです？ そんなに急いで・・・・・・」

「セシアが来た！ もう一人の後継者と共にッ・・・・！」

その言葉にクローディアは眼を見開いた。

「・・・セシアって、誰？」

「俺の、兄・・・です」

「お前、兄居なんだ」

「ええ」

クローディアは苦虫を噛み潰したような顔をしながら答えた。

「・・・と、云うか、もう一人の後継者？」

「初代王の記憶を受け継いだ方です。兄さんは何を考えているんだか・・・。。大して役に立たないのに・・・」

「云ってやるなよ。そう云う事、云ってやるなよ」

「ここらと軽く怒りながら云うと。クローディアは云った。

「そう、ですね。みなまで云ってやったら、あちらが哀れですね」

「そう云う意味じゃねえよ！」

「貴様等、少しは黙れ。取り敢えず、セシアがお前を呼んで来いと云っている。一緒に来い」

「厭」

即答だった。それは見事な程の即答だった。ついつい一つ、拍手。

「お前を連れて行かなければ、私が怒られるのだが」

「怒られてきて下さい」

「貴様、一度死んでしまえ」

「厭です」

「さつきから即答ばかりしおって！ 取り敢えず一緒に来いッ！」
カストルは気合で引っ張って連れて行くこうとしているが、悲しいことに、体格差で、引っ張ることは不可能の様だった。

「クローディア。俺も一緒に行くから。な？ 行こうよ」

俺が譲歩してやると、クローディアは少し考え、渋々と云った態度頷いた。

「判り、ました。雪弥君と一緒に行って下さるんなら、行きます」

俺とカストルはほんと、息を吐き、部屋を出た。

初対面。初の普通！

扉を開け、入ろうとしたら……。

「クウウウウローディアアアアアッ！！ 逢いたかったよオオオオオオオッ！」

「ッ、死ねええッ！！」

まるで、嵐だ。俺はそう思った。

クローディアにすかさず抱きつこうとしていたのが、噂(?)のセシアさん。……ブラコンだった。

「是は是は、陛下^{へいか}……お恥ずかしい所を見せてしまった。申し訳ない」

「……いえ……」

どうしよう、顔が引き攣る。だって、セシアさんの膝の上に……
……上にッ！

「兄さん、いい加減下ろして下さい！」

金髪紫眼のセシアさん。顔は二人共似ている。身長は、残念ながら
とにクローディアの方が大きい。

「セシア、此の人は……？」

ポツリ、と幼い子供の様な声が聞こえた。其の声の主はセシアさんの隣に座っている、少女だ。光の反射で金髪に見えるけど、色素

の薄い茶髪の黒に近い藍色の瞳。此の子が初代王の記憶を受け継いだ子。

「さあ、王陛下に挨拶をして下さい」

セシアさんが俺に挨拶するよう、少女を促す。少女は少しおどおどしながらもきちんと挨拶をした。

「初めまして、倶梨伽羅瑚劉くりからこうりゅうと云います。以後お見知りおきを・・・」

「あ、こちらこそ。俺は鳴瀬雪弥です。よろしくね。そう言えば、年は・・・？」

ちよつと失礼かな、と思ったけど、少し好奇心が・・・。

「年は・・・」
瑚劉は俺を見て、云った。

「二十歳はたちです」

「うっそっ！！？」

それは詐欺だろう！ 其の幼児体型で、二十歳は無いだろう！！
「此の子は、ちよつと色々あつて、身体がちゃんと成長しないんだよ」

やんわりと、セシアさんが説明してくれる。其の時、彼女は暗い顔をしたから、俺は咄嗟とつさに謝った。

「ご、御免！ 物凄い無神経な事云ったね・・・。ホント、御免」

「いいの、大丈夫。だから、私は此処に逃げてきたの」

「・・・？ 逃げる？」

聞き返す。意味が、判らない。

「そう。だって、人間界あっちは、私を必要としてくれない！ だから、私を必要だと云ってくれた、セシアに付いて来たのよッ！！」

「・・・何処が、“逃げ”なの？ 立派じゃないか」

「え．．．．．？」

瑚劉は顔を上げて、俺の眼を見る。俺は優しく微笑み、言葉を続けた。

「確かに、はたから見れば、“逃げ”なんだろうけど、それは、俺にとつたら“逃げ”じゃない。それは“強さ”だ。自分を必要としてくれる人の為に、頑張ろうと思ったんでしょ？」

そう、聞く。瑚劉はコクンと頷く。

「だったら、立派じゃないか」

俺が云い終わって、少し経った後、瑚劉は少しずつ涙を流し始めた。

「皆さん、いい加減俺を忘れてません．．．．．？」

突然の声に、俺は顔を引き攣らせた。

すっかり、クローディアの事を忘れていた．．．。

円舞曲

ふわりふわり。

薔薇と共に、舞うのは、一人の少女と、青年。

今日はカストルも巻き込んで庭園でお茶会。それでセシアさんがいきなり「円舞曲ワルツを踊りたいッ」と云ってきたので、瑚劉と踊ってもらった。

「・・・二人共、絵になるなー・・・」

ぼそりと、俺が呟く。それにクローディアが頷く。

「あの二人はお似合いですね。そうだ、雪弥君、俺と一緒に――

――」

「却下」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「却下」

「まだ、何も云ってませんけど?」

「そうだな、だが、予想はつく。俺は円舞曲ワルツは踊れない」

「でしたら、練習がてら、踊りましょうよ。俺が淑女役レディをするので」

「・・・・・・・・踊る機会は?」

「有ります。晩餐会等を開いたときに淑女と踊るのです。今のうちに覚えましょう」

「・・・・・・・・お前は女のステップが出来るのか?」

「はい、兄さんに無理矢理叩きこまれたので」

「・・・・・・・・判った」

「よいお返事で」

クローディアは何処かへと消え、何かを持ってきた。

「……蓄音機ちくおんき……?」

「ええ、普通は楽器でやるものなのですが、其処まで大がかりなのは出来ませんから、蓄音機こゝれで代用です。曲は、そうですね……、ミハイル・グリンカの『幻想的ワルツ』で行きましょう!」

そう云って、クローディアは俺を引き寄せ構える。おわー、近い。是の原曲はピアノの独奏曲何ですが、今は管楽器として有名なんです」

「へー……。あ、踏んだ、御免」

「よくあるハプニングです」

「あと後そう云ってられなくなるぞ」

「……」

その後、俺の云った通り、“ハプニング”の範囲には収まらなかった。

曲が終わり、離れる。

「……大丈夫か?」

「右足が麻痺まひしてるんですが……。歩けない」

クローディア、退場。

「じゃ、次は俺達が踊ろう。曲はチャイコフスキーの『交響曲第5番の第3楽章、くるみ割り人形より花のワルツ』で行こう」

よく円舞曲ワルツの長ったらしい曲名を覚えてるな、こいつらは。

曲が流れる。これは何かで聴いた事が有る様な……。ま、いつか。

「ホント、キレーだな……」

「どうでもいいが、私が此処に呼ばれた理由は何だ!？」

「・・・・・・・・」

軽く忘れてたよ、カストルの存在を・・・・・・・・。

「・・・給仕、じゃね？」

「執務をしろ、糞王陛下!!」

めっちゃ罵倒された・・・。

ああ、戻ってこい。楽しい時間。

円舞曲ワルツを踊った後、俺はカストルに怒られながら執務室に戻った。

「えーつと、．．．あ、そう言えば、クローディアは？」

「知らん。もしかしたら医務室だろ」

「あー．．．．．」

俺の所為だな。

ああ、庭で未だに踊っている二人（セシア&瑚劉）が憎たらしい．．．ああ、憎い。

「いい、曲だなー．．．クラシックはたまに聴くと良いかも．．．」

「そう、だな．．．それは私も賛同しよう」

カストルも目を細めて曲に溺れる。

「．．．これは、シヨパンの『華麗なる円舞曲』だな．．．．．あつたんだな、此処に」

「なんで、皆覚えられるんだろうな。名前」

ホント、不思議だ．．．。

その後、数時間経った後、クローディアが復活した。どんだけ時間かかってるんだ．．．おい。

「復活いたしました。そして、雪弥君、一生淑女レディと踊らないでください」

「おう。判ってる」

俺は笑顔で答えた。俺だって踊りたくねえよ。

「にしても、書類多いな．．．メンドイ．．．．．」

「しょうがないでしょう？ そろそろ戴冠式たいかんしきがあるんですから」

「……ですよねー……」

やっぱり俺は帰りたいかも。めっちゃ帰りてえ。

「雪弥君、帰りたいなんて、考えないで下さいよ。此の前云ったでしよう?」

・・何故、判るのだ。こいつは。

「俺と約束をしたでしょう? 其れを破ると、云うのですか……」

・・?

「云ってません。前思撤回いたします」

「よろしいです」

クローディアは笑って、傷すを返し、一旦部屋を出た。

「お前、王としての自覚はあるのか?」

「……無いかも」

そこ、溜息を吐くな。マジで悲しいし。

帰って来た、厭な時間。

「では、陛下。リラックスして」

「で、セシアさん。何で俺はまた円舞曲ワルツを踊る羽目に・・・？」

「ん？ 俺が陛下と踊りたいから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・クローディアがめっちゃこっち睨んでん
だけど・・・・・・・・」

「だね」

何故、クローディアは俺を睨んでいるんだ？

そう思っていると、セシアが耳打ちしてきた。

「大丈夫。陛下を睨んでるわけじゃないから。安心して」

そう云うけど・・・・・・・・めっちゃ俺を睨んでるんだと思うんだ
けど・・・・・・・・。

「楽しい」

ぼそつと、セシアは何かを呟いたけど、それは俺の耳に届いてい
なかった。

曲は確か・・・『フランシスコ・カナロの黄金の心』・・・だっ
け？

クローディアの時より踊りやすい・・・。

「当たり前。あいつのリードは下手糞だからね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何故判ったし。

この兄弟は不思議だ。俺はつぐつぐそう思う。

「陛下、筋はいいね。こつちも踊りやすい」

「そ、そう．．．．．？」

「ええ！」

笑顔のセシア。其の笑顔はクローディアと酷似している。綺麗だな。

「有難う、陛下。貴方に綺麗だと思われて、俺は物凄く幸せ」

「．．．．．」

もう一度云う。

何故判ったし。

相変わらずクローディアは俺を睨んでいて、セシアは笑っていてカストルも居て、俺を物凄い剣幕で睨んでる（これは何時もの事なので気にしない）。

「．．．大変、だな．．．．．、是は」

溜息を吐きつつ俺は云う。

執着心の煽り方

一通り踊った後、カストルに引きずられて俺は執務室に戻ることに。．．．．．後ろを歩いているクローディアの視線が相変わらず痛い。

そして、何故瑚劉とセシアさんまで後ろについてきているのだろう？

「クローディア、そんなにも陛下を睨んだら駄目だろ？」

「お前には関係ねえだろうが。」

「へ？」

今の、クローディアか？　へ？　今のが？　あれ、でも、口調が．．．．．あれ？

「クローディア、素に戻ってる。お止めなさいな」

一方セシアさんは飄々としている。怖気づいた様子はない、よな．．．？

俺が少しびくついていれば、クローディアはそれに気付いた様で、顔を手で覆った。

「申し訳在りません。雪弥君が悪い訳じゃないんです。勝手に、キレているだけなので．．．．．」

「そ、そか．．．．．」

なんだろ、納得いったような、いつてないような．．．．．ま、いいか。

「取り敢えず、貴方には、関係有りません、心配させて、申し訳有りません」

「．．．．．」

流石に、「関係無い」はきつい。それは、相手を突き放している
感じの言葉だから……………。

俺の心情に気付いたのか、セシアさんは顔を寄せてくる。

「御免ね。あいつ、元は口下手で、皮肉屋だから。ああゆう言い方
しかた出来ないんだよ」

「そうなん、ですか……………?」

「兄さん、雪弥君から離れ下さいッ!」

「判った判った、そう睨むな」

クローディアが俺に近付いてきて、俺をセシアさんから（ついで
にカストルからも）引っぺがした。

ぎゅう~~~~

力任せに抱きしめてくるので（いや、締め付けているがしっくり
する）、骨が折れそうな勢いだ。

「……………痛いっ! めっちゃ痛いから! お前、着やせするタイプ
だろう! めっちゃ筋肉質……………ッ、痛いっ!」

「あ……………申し訳有りません……………」

ぱ、と離すクローディア。ああ、腰が逆に曲りそうだった……………
……………。

「にしても、物凄い執着だな……………。俺もそっちにしとけ
ばよかった」

「ッ」

最後の呟きは俺には聴こえなかったけど、隣に居る瑚劉が息を呑
んでいたの、きつと大変なんだろうな、とは思っ。

執着心の煽られ方。

ああ、苛々する。

「さて、陛下。ここはね……………」

「え、と？」

兄と雪弥君が話している……………って、近過ぎるだろう、もうちょっと離れる、愚兄っ！

はた、と我に返って、顔を手で覆う。

最近……………冷静さを、失くしつつある……………。
それもこれも、全てあの兄の所為だっ！

「……………雪弥君、そろそろお茶休憩ティータイムにしましょう」

「ん？ 判った。今日の、おやつ何？」

嬉しそうにひよこひよここと寄ってくる雪弥君。……………小動物みたいだな。

「今日は先程俺が作った Pound ケーキです。味の保証は出来ませんが」

くすり、と笑いながら云うと、雪弥君は綺麗な笑顔で云った。

「クローディアが作ったものなら、美味しいだろうな」

「……………」

どうして、こう……………人が動揺する言葉を、軽々しく云えるのか……………そんなだから、セシアに気に入られるんだよ……………。

「どうにかして、消せないだろうか……………」

「へ？ 何か云ったか？」

「あ、いえ。何も」

しまった、また素を見られるところだった。

「最近、クローディア・・・冷静さを失くしてないか？ 大丈夫？」

ああ、此処でいつきにこいつを殺せたら、どれだけすっきりするだろう。めっちゃすっきりするに決まってる。ああ、殺したい。

「・・・何、遠い眼してんの？ クローディア・・・・・・・・」

「ああ、ちよつと欲に耽ってまして・・・・・・・・」

「どういう・・・」

ちよつと不審がられてしまった。ううん、どうしようか。

綺麗な顔で、笑う雪弥君。しかも、対象がセシア・・・・・・・・。

いい加減、殺したくなってきた・・・・・・・・。

私はいらないのでしょうか？

「あれ？ 瑚劉、どうしたのさ、こんな所で」

声を掛けられ、私は吃驚する。瞳をあげれば、セシアが微笑って私を見下ろしていた。

「セ、シア……………」

——「俺もそっちにしとけばよかった」

あの言葉が、頭の中で反芻する。セシアは、私を本当に必要としてくれているのか、と思つて。

声出したくても、問い質したくても、声が喉に絡まって、声が出ない。

「セシアは……………セシアにとって……………」

「ん？ 何？ 俺にとって？」

セシアは腰を折り、私の視線に合わせてくれる。この優しさが、私の胸を打つ。

「セシアにとって、私は必要な存在？」

思つても居なかった質問だったみたいで、セシアは息を呑んだ。

「……………どうして、そう思うの？」

「だって、この前……………自分も、陛下がよかった、って……………云つていたじゃない……………！」

そう私が涙を滲ませた声で云えば、セシアはきよをつかれたような顔をした。

「あー、聞こえてたんだ……………」

こくり、と頷けば、セシアは少し考えたそぶりを見せたあと、云

った。

「ぶっちゃけ、瑚劉は記憶しか継いでないから、記憶を陛下に渡せば、瑚劉は用済みなんだよね」

その言葉に、私は瞠目した。

だって、セシアは残酷なことに、その言葉を明るいついで云った。私の目の前で。

「わ、たしは……要らない、の……」

訊けば、セシアは悪辣に笑って答えた。

「端的に云うと、ね」

それを云って、セシアは私の目の前から消えた。

——いら、ない……？ 私は、此处でも要らないの……
……？

私は、そこから一步も進めずにいた。あの頃から——。

セクハラ抗議程下らないものは無いだろう。

最近、瑚劉とセシアさんがぎこちない気がする。

「いや、違うな……」

瑚劉が、セシアさんを避けている。だって、セシアさんは何時も通り飄々としているから。

「勘がいいね、陛下は」

「ッ！？ いきなり、出てこないで下さい……！ そして……」

「雪弥君にくつつかないで下さい！ 兄さんっ！」

ベリッと音を立てながらクローディアはセシアさんを俺から離れた。

「酷いな、クローディア。俺と陛下のスキンシップを邪魔するな」

「それはセクハラです。何処をどう見たらスキンシップなんですか！」

クローディア、お前のそれは正論だ。もっと云ってやれ！

「酷いですねえ、陛下。俺とのコミュニケーションを否定するなんて……」

「……いや、コミュニケーション、スキンシップはもっと軽い、まともなものでお願いします」

つい、云えば。

「あ、これがセクハラで、重いものと、陛下は認識していらっしゃるんですね。なら、やってもセクハラにはなりませんね」

「「なるわっ……！」」

もう、頭が痛い……。

「頭が痛いので、私は失礼させていただきます」

「え？ 瑚劉？ 大丈夫？」

「はい、陛下。少し寝れば大丈夫です。それでは」

瑚劉は静かに、戸を閉め、出て行った。

「…… 大丈夫、かな…… 瑚劉……」

「大丈夫でしょ。あの子が自分でそう云っているなら」

「……」

「？ どうしたの、二人共」

「何故（お前・貴方）が此処にまだ居る（んですか）……」

敬語は俺。滅茶苦茶乱暴な言葉を使っているのはクローディア。
珍しい。

「だって、瑚劉がああなの、俺の所為だもん？」

「“だもんハート”、じゃ（ねえ・ない）！！ どういうこと（だ・なんですか）……」

「ちよつと、二人共ハモリ過ぎ。妬いちゃうよ？」

「勝手に妬けばいい」

そう云って、クローディアは俺の肩を抱いた。何故だ。

「と、ついでに、クローディア、お前、素に戻ってるぞ」

「あ……」

クローディアは俺を見た。そのあと、溜息を吐きながら片手で貌を覆った。

「ぎこちない理由へワケ」とは。

俺とクローディアでセシアさんを囲み、尋問することに。主に訊くのはクローディアだけだ。

「で？ 倶梨伽羅と何があったんです？」

「んー、まあ、ちよつと、ね……………」

ニコニコと笑いながら言葉を少し濁すセシアさん。俺を屈んで、セシアさんの貌を覗きこむ。すると、ガバツと膝に乗せられた。

「う、わっ！！？」

「ツ、兄さんッ！ 何してるんですか！！」

「んー？ 陛下は抱き心地がいいなあ？ キモチーい」

すりすりと背中を頬擦りされて、俺は貌を赤くする。みるみるうちにクローディアは不機嫌になっていくし…………っ！ 何でさっ！？

どうにかセシアさんから離れたと思ったら、次はクローディアに抱きこまれました。なんでかな…………。

「俺がさ、やつは陛下の方がよかつたな、と呟いたのですよ。それを見事瑚劉は訊いていましてねえ…………。で、訊かれたのですよ。」

俺にとって瑚劉は必要な存在か……………」

俺も、クローディアもセシアさんから紡がれていく言葉に目を見開いていく。それでも、セシアさんは何時ものように飄々と明るく話す。

「で、俺は応えました」

「端的に言えば、儀式を終えれば用済みだ、とね」

ニカツと笑って、云った。

なんて残酷な人だろう。こんなことを簡単に、明るく云えるなんて……。

「ふふ。二人共面白い反応をするね。陛下はともかく、クローディアは知っていただろう？ あの子は必要の無い子だって。カストルも、城の皆知っていることだ」

その言葉に俺は弾かれた様にクローディアを見た。クローディアは渋い貌して俺から眼を背けた。それは、肯定の意だ。

「クローディア……」

貌を歪め、俺はクローディアを見つめる。

言質を取るのは結構簡単かもしれない。

俺の顔を見て、セシアさんは「あーあ」と云った。

「根源は俺が悪いとは云え、陛下にそんな顔させちゃ、ダメだよ？ クローディア」

最後は悪辣に晒った。そして、俺の腕を掴んで、俺を抱きしめた。
「ねえ、陛下はどっちがいい？ 俺と、クローディア……どちらを、側近兼家庭教師にする？ 陛下は……どちらを選ぶ？」

耳朵を打つ優しく残酷な声。俺は少し顔を紅潮させながら云った。

「俺を連れて来たのはクローディア。瑚劉を連れて来たのはセシアさん。セシアさんはちゃんと瑚劉を見て。初代王の記憶を継いでいるとか関係無く、瑚劉を本人を、見て」

俺は云う。きっぱり、と。クローディアは眼を見開き、セシアさんも少し息を呑んでいた。

「つまり、俺を選ばない、と………？」

「端的に、云えばね」

くす、と笑って云ってやる。そう云えば、セシアさんは片手を口にあてて、肩を震わせて笑っていた。

「は、はは……っ！ 陛下らしいや……。くやしいなあ…俺は陛下の為ならなんでも出来そうなのに………」

セシアさんは俺を降ろしながら云った。

「じゃ、俺の為に瑚劉の傍に居てよ。瑚劉自身を見て、瑚劉の為に傍に居てよ」

「言質を取られたな」

俺の言葉にクローディアは笑ってそう云った。

セシアさんは俺の前に立って、恭しく最敬礼をして、云った。

「御意、我が王陛下」

頭を上げた時、セシアさんはすっきりしたような、そんな笑顔だった。

仲直りって、難しいね。

そう、陛下に云われたけど……。

俺はとてとて、と廊下を歩きながら考えた。

幾らね、俺の可愛い可愛い陛下からの頼みでも……自分から謝るのって、苦手なんだよね……。

「どうしょ……」

こんな事で瑚劉に謝らないで、陛下にもっと怒られたら……俺、今度こそ嫌われそう……。

「厭、それだけは厭……」

陛下に嫌われるのだけは、死んでも厭だ。他の何を失っても、それだけは厭だ。

「瑚ー劉ー？ 何ー処行つたかなあー!？」

半面倒くさがって、声が適当だけど、これでも一生懸命なんだよ？ 陛下に嫌われないために、ね。

「……屋上か、部屋か……」

思いつく瑚劉のお気に入り場所を手当たり次第に廻って見て行った。

最後は自室。流石に、な……淑女^{レディ}の部屋に勝手に入るのは、思っ
て最後にした。意を決し、ノックをする。

「……はい……」

弱弱しい小さな声。俺は、それに少しイラッとした。

「瑚劉っ！ 俺だ！ 今すぐこの扉を開けるッ！」

つい、怒鳴ってしまふ。瑚劉はそれに吃驚したみたいで、小さな悲鳴が奥から訊こえた。

「瑚劉っ」

もう一回、怒鳴れば、静かに扉は開いた。

「陛下に云われた。瑚劉を自身を見て、傍に居ると。後継者の……一人としてじゃなくて、瑚劉本人を見ろ、と」

静寂がはしる部屋に俺の声だけが響く。

「だから、これからは陛下の命令に従って、瑚劉自身を見て、瑚劉の傍に居るよ」

いいね？ と眼で問いかければ、瑚劉は今にも泣きそうな貌で俺を見た。

「それでも、いい……セシアが、私の傍にずっと居てくれれば……私を必要としてくれるなら……それでいい……」

それを云い終わった後、瑚劉は俺の膝の上で泣いた。

ああ、何て可愛げのない、何処にでもよく居る小動物のようなんだろう——？

その時、そう思った。

陛下に、逢いたい。陛下に触れたい。

クローディアなんかには、陛下はあげない――。

いつつぁ、闇ナベばぁーていー！　したくねえ！

セシアさんと瑚劉が仲直りして、いつも通りって、思ってるんだ
け、ど……………」

「……………」
なんか、空気微妙。なんつつか、セシアさんの機嫌が悪い、よう
な…………？」

「ご名答。俺、今すっごく機嫌悪い」

うん、久しぶりだな、コレ。

「ねえ、陛下…………」

セシアさんは、やる気が無いといったような抑揚の薄い声で俺に
声を掛けてきた。

「うん？」

「闇ナベしない？」

「どんな心境！？」

つい、叫ぶ。いや、だって唐突過ぎるでしょ。

そして、なんか超不機嫌なセシアさんの提案で、闇ナベをするこ
とに。

メンバーはいつも通りの俺、クローディア、セシアさん、瑚劉。
ついでにカストル。こちらにも不機嫌でお送りいたします。

「それではそれでは、今から闇ナベします。きやは？」

超棒読みでセシアさんは云う。……なんか、壊れてきた気がする。

「えー、材料は全て巻き込まれて超不機嫌なカストルに用意してもらいました♪ えー、主な材料は青酸カリ入りの砂糖と同じく入っている塩。そのへんに生えていた食べれるか判らない雑草どもに、唯一まともな材料ナスビです♪」

「……ちよおつと待てええ————ッ！」「」「」

これまた超棒読み^{プラス}+語尾に音符のセシアさんの言葉に、俺とクローディアと瑚劉は突っ込む。

「あ、あと。一番臭い使用人が昨日履いていた靴下も入ってます？」

「……ハートもいら（ねえよ・ないわよ）ッ！ ついでに靴下洗（えよ・いなさいよ）ッ！」「」「」

俺達が叫ぶがセシアさんは訊く耳もたずで、綺麗にスルーしてくれる。

「あ、追加入りましたー♪ 腐った蜜柑です？」

「……いい加減に（しろ・して）ッ！」「」「」

セシアさん、なんか暴走してるし……！！！！

そして、皆でどうにかしてセシアさんを止めることができた。

だ^が、そのあと俺達は盛大にカストルに怒られました。

テンション上がらないでいて欲しかった。

この前は散々なめにあつた……。

なんか、やっぱセシアさん機嫌悪いし……やめてほしいなあ、こういう雰囲気は嫌いだ……。

「……セシアさん……嫌い………」

俺が部分部分に言葉を云うと、それを勘違いしたセシアさんが俺の元に猛ダツシユで来た。

「なんで！？　なんで俺のこと嫌いな！？　俺なんかしたツ！？　俺、陛下に嫌われるようなことしたつけツツ！？　ねえ、陛下あ！！」

……うん、正直云って、怖い。

少し貌を歪めながらひいてっていると、いきなり後ろから持ち上げられた。

「ふ、え……？」

「兄さん。雪弥君に触らないください。貴方は雪弥君に嫌われたのでしょう？」

少しばかり怒りながらも何故か優越感に浸っているような貌をしているクローディア。めっちゃにやけてるんだけど。

「ググッ……！　だから、その理由を……、訊こうとしたんじゃないか……！！」

セシアさんはそう云いながら俺をクローディアから離そうとしている。だけど残念なことに、クローディアの方が身長が高いんだよ

な……。

「あ……いや、俺、一言もセシアさんが嫌いだなって、云ってないよ?」

「へ?」

二人は同時にキョトンとした顔になった。やっぱ、顔つきが似てるからか、双子に見える。

「だからね、俺はセシアさん機嫌悪いし、なんかいやな雰囲気だから、こういうのは嫌いだなーって……呟いていたんだけど……」

そう弁明すれば、セシアさんは喜び、クローディアは舌打ちをした。……うん、取り敢えず、舌打ちするのは結構なんだけど……

「クローディア。下ろして……」

俺がクローディアの顔を覗き込みながら云えば、クローディアは貌を真っ赤にして俺を下ろしてくれた。

アフターヌーンティー

「ユキヤ。午後のお茶を持って来てやったぞ。少し休憩しろ」

此処で神の助けッ!

有難う、カストル。一瞬でもお前が優しくしてくれたから槍でも降ってくるんじゃないかと思ったことは忘れるよ。

「はー……落ち着く……。これ、アッサム? 美味しいね」

「お前は味音痴じゃないんだな。そういえば、シェフが熱出して違うやつが作った時も気付いたな」

カストルは感心したように俺を見た。

あ、スコーンだ。少し味気ないけど、甘くないのであまり甘味党では無い俺にはもってこいだ。

「これ、少し味がついてる。でも、お前ように甘くない様にはして

ある」

……なんだろう。カストルが所謂……あれだ。ツンなんとかに見えてきた……。カストルって、案外面倒見いいんだよね……。

あ、でも……デレないか……。

「あ、確かに。チョコチップはいつてるし。旨いわ……」

ほんわかと笑いながらそれを咀嚼^{そしゃく}する。

「陛下。俺にも頂戴。」

「え？ はい……」

と渡しかけて、ギュツと腕を掴まれた。

「……………セシアさん？」

俺は眼を見開く。そのまま口へ運び、食べた。かるく、指を掠めたぞ、おい。

「ッ、兄さん！ 何をしてるんですかッ！？」

「何って。陛下に食べさせてもらっただけけど？」

「いや、無理矢理だから。」

セシアさんの言葉に間髪いれずに否定をいれる。

「酷いな、陛下。ねえ、陛下は俺とクローディアと、どっちが好き？」

「？」

「……………どんな？」

その質問に意味とは。

「意味？ それはな……俺の好奇心？」

うん、一言。

フザケルナよ。

そして、テンションもどってきたな、セシアさん。

「別に……どっちがどっち的な事はないけど……どちらかというと、接しやすいのはクローディア。いろいろお手本になったりなかったりはセシアさんかな……」

「ふふ、陛下らしい答えだね」

妖艶で艶やかな綺麗な笑み。まあ、女に見えるなあ、アンタ。

「まあ、覚悟していてね、クローディア。俺、陛下を諦めた訳じゃないから。いつかお前のその場所に俺が行く」

そう云って、セシアさんは出て行った。

ほんの些細なきっかけなのに恐ろしいものだ（前書き）

今回はクローディア視点。

ほんの些細なきっかけなのに恐ろしいものだ

例えば、そんなややこしい機会是要らない。

ほんの少しの些細なきっかけがあれば、それは叶うのだ――。

――目覚めよ

とか、そんな言葉も要らない。

ただ、本当にほんの些細な小さなきっかけだけがあればよいのだ。

そう、今この瞬間、俺は盛大に驚いている。

それはいつもの昼下がりの事――。

今日も執務を全うした雪弥君は庭に出ていた。

「やっぱり、綺麗だな……此処の薔薇は……」

雪弥君は棘に刺さらないように薔薇に触れていた。雪弥君は青薔ブラウローゼン薇イゼンが好きなのでそればかり触っている。

「青薔薇……雪弥君の眸と同じ色ですね……」

そういえば、初代も青薔薇ブラウローゼンばかりを愛でていたな。ホント、そっくりだな。

「清き心にしかこの美しさは判らないものです。それに、ブラックアウトワールドの青薔薇ブラウローゼンは下心や罪などが有る者には触れることが出来ないんですよ」

「へー、そうなんだ……じゃ、セシアさん触れないだろうな……」

……」

雪弥君、今さらつと酷いこと云いましたね。

「ゴホン。まあ、そんな風に云われているので、ここで懺悔される方も多く、青薔薇ブラウローゼンに触れられればその罪などは赦された、とも云われるのです」

所謂協会の懺悔室のようなものです。と云えば雪弥君はどこか遠い眸めをしながらそれを見ていた。

「そっか……懺悔か……なんで、そういう心の綺麗な人に限って罪を犯してしまうんだろう……」

——成程、と思って平気だろうか。だが、確かにそっかもしれないな。

懺悔が出来るほどに其の者の心は綺麗で清らかな筈。

「きっと……綺麗な心を持っていても、後ろ暗いものがあるのでしよう——」

俺はポツリと呟いた。俺も、そういうものがある。

「ほう、其方そなたは私が居ない間に後ろ暗いものが出来たか？」

雪弥君の声の筈なのに、雪弥君とは違う喋り方。

俺は驚いて雪弥君を見た。

「久しいな、クローディア」

澄んだ青した眸では無い、禍々しくも綺麗で全てを吸いこんでしまいそうな紅色の眸。

「ユキ、ヤ……王陛下……」

まさしく、目の前に居るのは初代王・ユキヤセルディカルだつた――。

其の命令は案外不要だったりします。

自分を見つめる禍々しい紅色の眸から眼を背くことが出来ない。

「久しいな、クローディア……“私”が出てくるとは思わなかったか？」

クスリ、と微笑う姿は寸分違わぬ初代王、ユキヤ陛下。自分の最初の主。

「陛下……」

艶やかな綺麗と称される微笑み。だが、陛下を知る者が見れば“腹の底が読めん”と口をそろえて言うだろう。

でも、俺はこの微笑みが好きだった。

「クローディア……相も変わらず綺麗な髪だな……私は其方の髪が好きだ……」

陛下は俺の髪を一房持ち上げ、唇にあてる。俺はそれに貌を紅くする。

「薔薇の世話をしているせいかな薔薇の匂いがする……いい匂いだ……」

サラ、とその髪を落とし、次に俺の貌に触れる。

「其方の眸も好きだな……綺麗な紫電の色……吸い込まれそうだ」

―それは貴方の眸でしょう？

そう云いたかった。だが、あまりにも動揺している所為か、上手く口から言葉が紡ぐことが出来ない。

「ユキヤ……王陛下……？」

俺と同じように驚いた声が訊こえた。声を発したのはセシアだった。

「おお、セシアじゃないか。久しいな、其方も相も変わらず綺麗な髪と眸をしておる……」

陛下はセシアの方を振り返りながら歡喜の声をあげる。

「何故、陛下が……」

呆然としていたセシアは俺の方に寄ってきて耳打ちをする。

「どういうことだ？ 何故あの方が？」

「知るか。俺も気付いたら陛下が出てきてたんだよ……雪弥君はなかで眠っているのか……？」

それより、と続ける。

「なんでお前はあれが陛下だと判った？」

ん？ と首を傾げながらセシアは云う。

「多分……オーラ、とか？ なんか、いつもと雰囲気違ったから……それに、すっげえ懐かしい感じだったから……」

お前もそう思わない？ そうセシアは云った。

確かに、懐かしいと、今更思った。

「内緒話は終わったか？ 私は仲間はずれは嫌いだ」

ふわり、と微笑む。とても柔らかな印象をもたせる笑顔。

綺麗な紅色の眸が優しい色をたたえている。

「陛下……何故、出てきたのです？ 雪弥君が心配になりましたか？」

「否。彼に心配事は無い。だたな……私自身のこの眸で其方等を見なくなつてな……」

優しく青薔薇を撫でる綺麗な指を俺はずっと見ていた。

「この者に私は全てを託した。彼はよき王になるであろつ……私の能力を全て宿しているからな……」

陛下は俺達に視線をくれ、凜としたたずまいで続けた。

「私に忠誠を誓った者として、私の生まれ変わりであるこの者を命をかけて護りぬけ！　それが、私が下す、最後の命令だ！！」

片手を横へ勢いよく伸ばす。それで生じた軽い風に、少しばかり薔薇の花弁が舞う。

俺はくすり、と笑って跪き、左胸に手をあてた。セシアもそれに続く。

「「イエス
ユアハインス御意に、我が主」」

それに満足したようなふ、と微笑う声が訊こえたあと、どさりと音がした。

俺は驚いて貌をあげれば雪弥君が倒れていた。

「雪弥君！」

「陛下！！」

急いで抱きあげれば、スースーと規則正しい寝息が耳を掠めた。

「よか、った……」

寝てるだけだった。

「たとえば、命令じゃなくても……」

さらり、と前髪を梳きながら俺は微笑む。

「絶対に、命をかけてでも貴方を護り抜いてみせる……俺の唯一の
主……貴方だけに絶対的な忠誠をささげた……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7570p/>

行きついた場所が悪い。

2011年8月31日05時44分発行